



デンチャースペース義歯との出会い

デンチャースペースとは、失った歯牙や歯槽骨がもともとあった位置のことを指し、そのデンチャースペースにマッチした義歯を「デンチャースペース義歯」といいます。

私がデンチャースペース義歯に出会ったのは、1988年4月、加藤武彦先生（神奈川県開業：写真右）の診療室に勤務し始めたときです。加藤先生が作られる義歯は、下顎はピッタリと吸着し、外そうと思っても外れませんでした。患者さんは歯が残っていたころの顔貌を回復され、旧義歯のときよりもあきらかに若々しくなりました。久しぶりだとおっしゃりながら、おいしそうにテストフードを召し上がり、ニコニコしながら帰っていかれる姿を何度も見ました。

デンチャースペース義歯とは、そういう義歯でした。

患者さんをそのように変えてしまう加藤先生の姿が、私の目には、“歯科医師とはこういうものだ”と、強く焼き付きました。

加藤先生は、患者さんの訴えから、上顎の顎堤吸収が進んだ症例では、従来の歯槽頂を基準とした総義歯製法では舌房が確保しきれないために、患者さんに受け入れてもらえない義歯になってしまうと考えられていました。そのような状況に対応するために、長年行ってきた歯槽頂を基準とした製法から、デンチャースペース義歯へと転換されていったのです。

勤務医として加藤先生の臨床を間近でみて、直接指導もいただきましたが、加藤先生の臨床はまるで神の手をみているような感覚でした。2年後、自身の医院を開業し、デンチャースペース義歯を実践してみましたが、経験不足だった当時の私には、超えなければならないハードルがたくさんあり、完成までに非常に時間がかかってしまいました。その理由は、製作手順やデンチャースペースの理論がわかっているにもかかわらず、どこにデンチャースペースがあるのか、それを見つける基準を理解していないせいでした。

加藤先生は長い実践のなかで培った見識で、迷いなく義歯の形態を患者さんの口腔内に見つけて、それを具現化する術をもたれていました。一方、私にはそのような術は到底あるはずもなく、試行錯誤を繰り返すことでベストな位置を探すという手探りの手法をとらざるを得なかったために、時間がかかってしまったのです。そして、完

成したときには私も患者さんも疲れてしまうこともありました。

私の頭のなかでの勘違いもありました。萌出時の歯牙は口腔周囲筋によって誘導されて歯列を作るので、当初は、デンチャースペースは筋圧中立帯と一致すると考えていたのです。すべての歯牙が揃っていて口腔機能を維持している患者さんであれば、筋圧中立帯とデンチャースペースは一致すると思います。しかし、多くの患者さんでは、合わなくなってしまった義歯を使用していたり、徐々に歯牙を失うことによって機能が維持できていないことが多いので、このような状態で筋圧中立帯を求めても、歯牙萌出時の口腔機能とは違うので、デンチャースペースとは一致しないのです。

そのことに気づいてからは、どこかに基準はないかといろいろと模索するようになりました。そもそもデンチャースペースは、歯があったときの歯牙、歯槽骨の位置ですから、有歯顎の解剖と無歯顎の解剖を比較して、有歯顎と無歯顎の共通項を探し始めました。すると、いくつかのポイントが見つかり、そのポイントを基準にすると、歯牙があった位置や歯槽骨の形が想像できるようになったのです。頬舌的なデンチャースペースを見つけられるようになると、総義歯の製作が飛躍的に早くなりました。

ただし、上下的なデンチャースペース、すなわち咬合高径と顎位については、いまだ見つからない状況でしたので、この段階で義歯製作のスピードが落ちて右往左往という状況は続きました。そのようなときに、咬合平面と顎位の関係を、渡邊宣孝先生（神奈川県開業）から教わる機会がありました。これは有歯顎の骨格パターンと正常歯列が作る咬合平面との関係で、これを回復しないと安定顎位が得られないというものでした。いままで、仮想咬合平面をカンペル氏平面に平行に設定していた私は、なかなか従来の考え方を振り払うことができず、この骨格パターンによって咬合平面は変わるという理論を理解し、実践するのにかなり時間がかかりました。しかし、この理論を理解し、工夫してやってみると、不思議と咬合採得が楽にできるようになり、その後の顎位の変化もかなり小さい範囲で済むようになりました。

そして、最後は咬合調整です。どこをどう調整するのか、顎位の微小な変化に対応するにはどう調整するのか、限界運動の調整と咀嚼経路の調整はどこが違うのかなど、ここが義歯製作の仕上げとなる場所ですので、ここは、咬合器上や患者さんの口腔内でじっくりと研鑽を積む必要がありました。

このように、デンチャースペース義歯を作るためには、いくつかのポイントを押さえる必要があることがわかりました。そして、このポイントを押さえることによって、ある程度の確率で、患者さんが快適に使用できるデンチャースペース義歯を製作できるようになったのです。

臨床経験を重ねるにつれて、長期経過症例も増えてきました。経過を追っていくと、患者さんの個性も大きく関与しますが、適正な義歯が装着された患者さんは、顎堤吸収が少なくなるので、顎位の変化も最小に抑えられることが実感できました。

本書では、デンチャースペース義歯の理論とその実践を一つ一つポイントごとに解説し、臨床経験を補えるような基準やテクニックを紹介しています。若い先生方の一助になれば幸いです。

2016年 8月
田中五郎